山と博物館

第27巻　第1号　1982年1月25日　大町山岳博物館

雪の中の民宿（白馬村蕨平）　撮影　太田寛昭

民宿と正月

今年もあっという間に正月が終った。編集子から、「民宿と正月」というテーマを与えられて考えてみると、地域の経済活動とその土地の風俗習慣とは密接な関係にあり、経済活動の変化につれて風俗や習慣がいつの間にか変って行くものだな―と思う。

大北地方も太平洋戦争の頃までは、大町や池田の市街地を除いては、皆一様に農村集落で、一部に商店や勤め人の家などあっても、おしなべて古くからそこに伝わるしきたりによって、年末年始の行事は一年の中でもっとも格式と伝統を持つ年中行事が行なわれた。

暮れが近づくと何処の家も松迎え、餅搗き大掃除を行い、大晦日には松の腰を伸ばし、八丈紙を切り添えて各所へ松飾りと、お飾り（鏡餅）を供えて年取りの準備をし、借金払いや年貢納めにかけ廻り、それが済むまで遅くなっても家族揃って年取りの膳に付かなかったものである。

そして明ければ元旦、早々にお宮参りをしてき、「おめでとうございます」と新年のあいさつ廻りをし、少なくも三ケ日は仕事などしなかったものである。

ところが今はどうだろう。スキーが盛んになるにつれ、民宿地帯と呼ばれる白馬、小谷や美麻の新行部落では、忙しさのあまりずっと以前からこのような古いしきたりは見られなくなってしまい、新年だというのに「おめでとう」のあいさつもほとんど交されない社会となってしまった。

五十人も百人も泊める民宿では、正月はまさに戦場のようである。家の人もスキー客も新しい型の正月を反省するどころか、このような姿にます〳〵エスカレートしているのが現状である。

「古き良き時代」という言葉があるが、この言葉や昔の正月を懐しく思うこと事態が時代遅れなのだろうか。伝統的風俗習慣はやはりゆとりと充実の中から育つように思われる。

（山博調査員T・S）

唐沢岳幕岩冬期初登攀

大町山の会

幕岩西壁・正面ルート登攀

冬期初登攀～餓鬼岳～燕岳縦走

一九七九年十二月三十一日～八〇年一月四日

大町山の会　柳沢昭夫・柴田享彦　降旗厚

十二月三十一日、数年前なら考えられない数パーティーの登攀者達を見ながら我々も西壁に向かう。西壁下に十一時半。準備をし十二時半登攀開始。取付の凹角を登る。夏なら快適に登るピッチだが凍りついているためやっとのことで登り、草付テラス。二P目、凍りついた草付を左にトラバース四十メートル、ブッシュテラスへ。三P目、人工でハングを乗っ越し直上する。フリクションで右にトラバースして外傾テラスにつく。夏でもギリギリのバランスだったところはさすがに冬は不可能となる。ボルト二本を打ちこんでトラバース。四P目、枯木のテラスにて確保。十七時半となり後続はヘッドランプをつけ登って来る。全員集結十九時。枯木のテラスで雪をはらいのけビバーク。

一月一日、五P目、八時登攀開始。ブッシュまじりの垂壁を登る三十メートル。六P目、人工でハングを越しフレークのチムニーを目ざして登る。草付をやっとのことで登りブッシュの確保点に着く。七P目垂壁からブッシュへ。八P目コンティニュアスで右稜頭上に出て登攀終了。

十六時幕岩尾根にてビバーク。

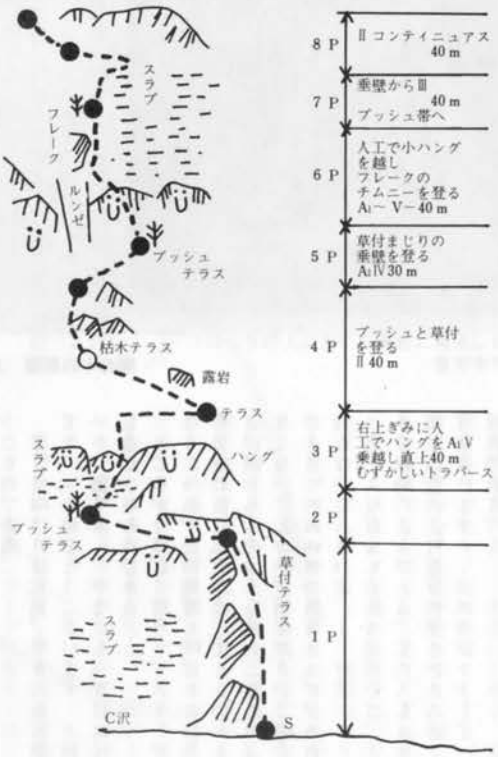
一月二日、幕岩尾根～唐沢岳～餓鬼岳～剣ズリ鞍部。

一月三日、東沢岳～北燕岳～燕岳を経由、燕山荘着十六時。

一月四日、吹雪の中、合戦尾根を下山する。

（記・降旗厚）

西壁正面左ルート　7P目登攀



唐沢岳幕岩西壁正面ルート図

幕岩西壁・中央ルンゼ登攀

冬期初登攀

一九八一年三月二十一日

大町山の会　柳沢昭夫・柴田享彦・降旗厚

八〇年三月、降旗、柳沢でこのルートを試みるが、一日かかっても下部の大氷壁が登れず敗退した。氷の下に水が流れ、十センチほどの厚さの不安定な氷で、どうしてもダブルアックスで登れない。氷を全部たたき落とし、フェイスの埋め込みボルトやハーケンを掘り出しながらの登攀であった。

その上、上部ルンゼの落ち口にぶら下がった巨大なつららが落下し、危険なこと、この上なかった。今回は再度の挑戦である。今年は雪も多く寒さも厳しかったためか、ルートにはびっしり氷がついている。

特に下部の氷は厚い。ありがたいことに昨年われわれを直撃した上部ルンゼ落ち口のつらも、数日前の気温のゆるみで落下したのか大きいのがついていない。

ドロワット北壁を単独登攀した鈴木恵滋さんからアドバイスをいただき、チューブとイボイボのアイスハーケンを充分に用意する。地元の利で大町を四時に出発し、唐沢出合まで車で送ってもらう。デブリで歩きにくい唐沢をつめる。〝大町の宿〟にはJCC大阪の二パーティーが入っていた。

九時、壁に取りつく。沢は多量のデブリで埋まり、夏にくらべると一ピッチ半ほど省略できる。最初のチムニーはびっしりと氷がついて、昨年より登りやすい。つららが下がっ

たハングの下で氷を削り、テラスを作ってピッチをくぎる。

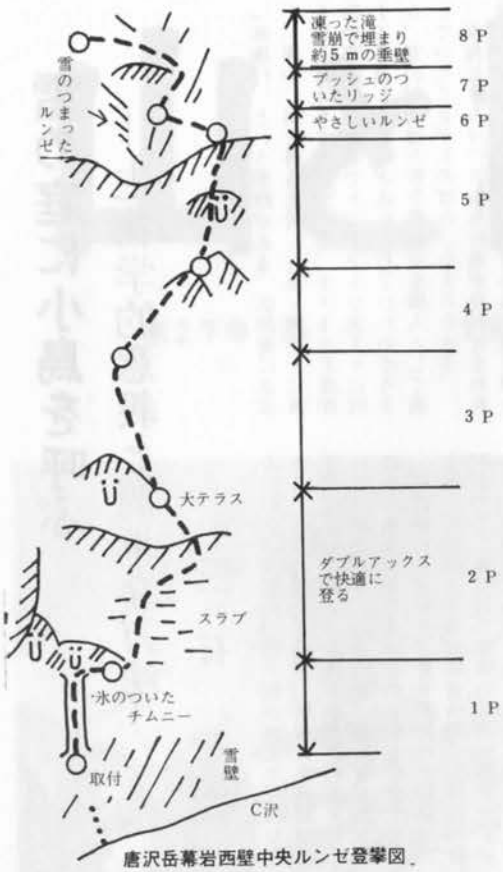
二P目は二十～三十センチの厚い氷の張りついた垂壁である。出だしは被り気味で、チューブハーケンを埋め込み、アブミをかけて乗っ越す。プロテクション用にアイスハーケンを打ち込むが、どのくらいきいているか分からない。

使用経験が少ないからだろう。トップがじりじりと氷の壁を登る。

緊張した時が一～二時間続く。少し出っぱった所を越えると夏の大テラスに出る。氷を削って広げ、後続を迎える。

三P目は、ブッシュをつかんで被り気味の氷壁を越えると、後は雪のついたフェイスで、雪が安定していて簡単である。

四P目、細いクラックにそって登る。薄い氷をはがすと水が流れている。夏は快適にフリクションをきかせて登るが、今はそれもできない。ハーケンを連打し人工で登る。ルートを開いた時のハーケンはほとんどがゆるんでいた。二P目と四P目がこのルートの核心部である。



唐沢岳幕岩西壁中央ルンゼ登攀図

五P目、人工で小ハングを乗っ越し、続いて垂壁をブッシュをつかんで強引に登る。リッジに出るとやさしくなるが、トップのザックの荷上げに苦労する。

六P目、七P目は左のルンゼに入り込んで登る。デブリで埋まっていてやさしい。

八P目、夏はルンゼ左のフランケを登ったが、今はデブリで埋まり、夏の苦労が嘘のようである。約五メートルの氷の垂壁を登って、後はやさしいルンゼを登り、トラバースして終了する。

十八時十五分、ビバーク。

翌二十二日、雪になり雪崩を心配するが、幸い二十センチの降雪だ。新雪雪崩の落ち着くのを待ち、ゆっくりと右稜を下降する。

B沢、C沢、D沢はひんぱんに雪崩れている。幕岩正面もS字ルートあたりに大きなものが落ち出した。やはり新雪があるとS字、明峰、畠山ルートは勿論、広島、大町、京都などの各ルートも、中間スラブ帯を通過中に上部大ハングを越えて落下してくる新雪雪崩にやられたら、ひとたまりもないだろう。

（記・柳沢昭夫）

唐沢岳幕岩冬期初登攀の記録

（大町山の会の記録）

①唐沢岳幕岩左稜大町ルート登攀～餓鬼岳縦走

一九七三年一月一日～一月七日

大町山の会　パーティー　柳沢豪・清沢浄・降旗厚

②唐沢岳幕岩正面壁・大町山の会ルート登攀

一九七九年三月十八日～二十一日

大町山の会　柳沢昭夫・降旗厚

③唐沢岳幕岩西壁・正面ルート登攀

登攀クラブ京都　山本一夫

餓鬼岳～東沢岳～燕岳縦走

一九七九年十二月三十一日～八〇年一月四日

大町山の会　柳沢昭夫・柴田享彦・降旗厚

④唐沢岳幕岩西壁・中央ルンゼ登攀

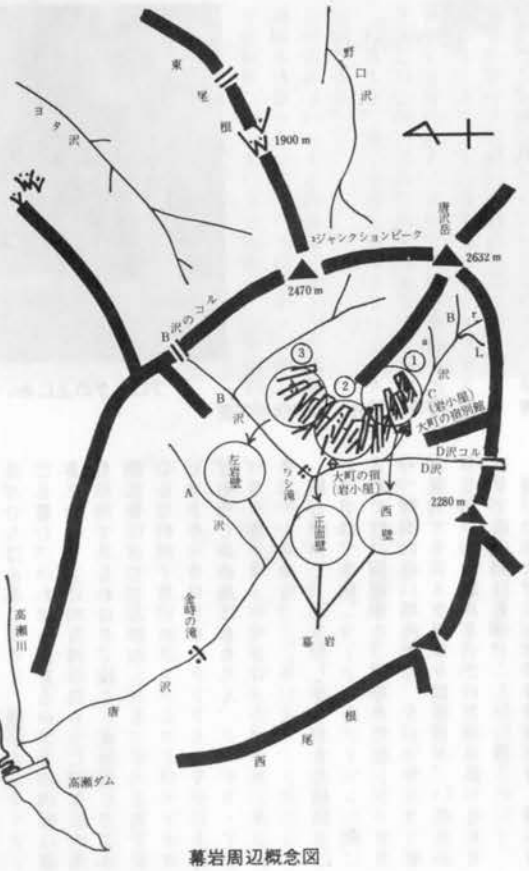
一九八一年三月二十一日

大町山の会　柳沢昭夫・柴田享彦・降旗厚

⑤唐沢岳幕岩西壁・正面左ルート登攀

一九八二年一月一日～一月二日

大町山の会　柳沢昭夫・降旗厚



幕岩周辺概念図

おわりに

幕岩の冬期登攀は力量あるパーティーによってほとんどのルートが完登された今日このごろ、これからの大きな登攀を目ざすには、充分なトレーニングを積んで岩壁から縦走へとつなげてもらいたい。

我会も幕岩から餓鬼岳、燕岳への縦走を三回行っている。登攀してからの縦走は厳しい。

又唐沢岳からの縦走路は、比較的人が入らないため降雪の多い時はかなり苦しい山行になると思う。

これを乗り越えヒマラヤの登攀や縦走、アルパインスタイルの登山を実践していきたいものだ。それを行うには苦しいトレーニングを積むことが必要ではないだろうか。

（記・降旗厚）

雪の庭に小鳥を呼ぶ
―生物学的意義と簡単な方法―

三石　紘

「寒施行」という季語がある。広辞苑によると「寒中に餌を得るに苦しむ狐・狸などに餌を施し与えること。」の意。ネズミなど農作物の害獣の捕食者であるキツネやタヌキに対する恩返しの意味が込められていたのだろうか、昔の村人達が野生動物達を隣人として遇していたことがしのばれ、心あたたまる。

寒施行とちょっと似た行為が今日行なわれ、徐々にではあるが普及しつつある。庭に餌をおき野鳥を呼ぶ行為だ。

雪の庭に直接残飯を撒きスズメを寄せるという素朴な方法から、いろいろの種類を呼ぶために、かなり手の混んだ装置や餌を用意するものまでいくつかの段階がある。動機もさまざまだ。単純に小鳥の姿を身近かでたのしみたいという願い、雪で餌が無くて可哀相だからという心情的な発想、反対に生態観察の手段、近い距離から写真を撮るため等々いろいろの思惑がからんでいる。鳥の身を思うものから鳥をダシに人がたのしむものまで…。

残飯を入れた餌台に来たカケス―志賀高原にて―

庭の餌台を含めて、野生動物への給餌は、生態学を中心とする関係者の間でも賛否両論があって、真に該当生物の保護に役立っているかどうかの評価が分かれているのが現状のようだ。

給餌を否定する側の論拠となっているのは、サルの餌付けによる野生の喪失、ハクチョウが給餌に依存しすぎて、給餌をストップされると餓死する例などである。いずれも、本来だったら餌不足によって劣性個体は淘汰され、そのことによってかえって種族自体の生命力（自然への適応力）は維持されるもの、給餌行為は近視眼的自然愛護行為であって、真の自然保護ではない、したがって人間はみだりに給餌などを行なわぬ方がよい、ひとりよがりのおせっかいが、かえって自然（野生動物）をだめにする、以上が否定論の骨子である。

肯定論者はこう反論する。適者生存の原則が種族の生命力の源であることは認める。しかし、今日の野生動物をとりまく環境は、劣性個体ばかりか、種の繁栄にとって最適と思われる遺伝子を有する〝強者〟にとっても、その個体生命維持自体が困難な状況となっているのが現状だ。したがって、本来の環境（人間が改変する以前の生息環境）に一歩近づけるための方策の一つとしての給餌であって種族維持にもおおいに貢献しているはずだ。

ブロックの上においた米粒に飛来したスズメ
―善光寺平にて―

生息環境についての現状認識と、近視眼的と批判されながらも、この行為が徐々にではあるが普及しつつある背景をふまえての給餌肯定論である。

けれども、庭で小鳥に給餌している人々は、そんなにこの行為の意義を詮索などしない。ちょうど昔の村人たちが、高尚な理論など持たなかったけれど、結果的にキツネやタヌキを守っていた寒施行の行為に似ている。

たとえば林の鳥のシジュウカラでも、原っぱの鳥ホオジロでもよい。昨冬は林や原っぱでなんとか虫を捜してすごしたとしよう。突然今冬は緑の全くない住宅地に変貌したとする。こんな光景は全国どこでも普通に起っている。さて、シジュウカラもホオジロもどうしてこの冬を乗り切ったらよいのか。こんな時、その住宅地の庭に餌台があったら、そして継続して給餌が行なわれていたならば、鳥たちはたすかる。また人間の側にとっても、身近かにやって来た小鳥たちに接して、生き生きとした自然に対する慢性的な渇望を一時（いっとき）満たすことができるわけだ。鳥も人も恩恵をこうむる行為として、ささやかな給餌は位置づくのではないかと思う。

さて、庭に小鳥を〆の方法論については、いくつかの類書があるので、ここでは簡単で永続きしそうな方法を数例紹介しよう。

大町地方のように雪深い土地で、庭がある程度広かったら、台所の残りくずを、そのまま地面におく。農家で庭つづきに畑などがある家では、なんだそんなこと、言われなくてもやっているよ、と云われそうだが、この方法がいちばん鳥は来るし、種類のバラエティにも豊む。いわゆる燃えないゴミの内容は雑多だから、主に肉食性の鳥も主に植食性の鳥もやって来るわけだ。地上に直接置く方法は、細工をほどこした餌台よりも、ずっと鳥が安心して利用する。スズメ・ムクドリ・オナガ・ヒヨドリ・カワラヒワ・ツグミ・キジバトなどおなじみの鳥はもちろん、アカゲラ・アオゲラ・カケス・ホウジロ・ウグイス・メジロまでやって来る。

庭が狭いし、もう少し手を加えた給餌方法としては、牛脂（ラード）をナイロンの網に入れて枝に固定する。町なかだとシジュウカラ、野山に近い場所なら、シジュウカラ・ヒガラ・カケス・キツツキ類などが、いれかわり立ちかわり訪れる。この方法は餌がなくなるまで数週間はもつ。

庭石の上などにヒマワリの実をおくのも有効だ。カワラヒワやシメなどがコタツの中から楽しめる。いずれも継続して、冬の間中餌を欠かさないこと。他にもいろいろの方法を工夫して、野生の訪問客を暖かく歓迎したい。

（長野県山岳総合センター専門主事）

山と博物館 第27巻 第1号
一九八二年一月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL②〇一一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二〇〇円（送料共）切手不可
郵便振替口座番号（長野四―一三三（九三））